

甘味・苦味・渋味

松枝 勝一(高6回)

初声をあげて七曜廻りだす
 岬馬走る親仔や朝霞
 金色の招き拳や蕨山
 幟立つ夕日に向かひ肩車
 押鮎や重ねる石の母の味
 寂光をまとひ散りゆく白牡丹
 「日の丸」の金魚が酔ふて宇宙旅
 草鞋はく新葉の香や舞台裏
 遠嶺を越えて動かざる鰯雲
 山毛櫟林ただよひそめし菌の香
 荒磯の夕日明りや鮫鯨鍋
 百代の沢庵石の重さかな
 川底に力残して水潤るる

俳句

深雪晴

山崎美恵子(高21回)

手品師のカード果て無し銀杏降る
 人吞みて芒原は波高し
 立冬や透き通りゆく鳥の声
 路地出口冬夕焼に塞がれり
 主なき庭に一輪冬の薔薇
 寒星の紛れて夜の観覧車
 凍蝶の影固まれりアスファルト
 一月の三月堂の祈りかな
 遠き日の我の背を追ふ雁木かな
 もう庭の跡形もなし深雪晴
 雪晴や光分け合ふ町となり
 太陽をいくつも踏みて雪解道
 日脚伸ぶ町の外れの湯屋の窓